彦根市埋蔵文化財調査報告書第39集

高宮城跡 Ⅲ

―高宮幼稚園増築工事に伴う発掘調査報告―

平成19年3月

彦根市教育委員会

目　次

例言
Ⅰ　はじめに ―――――――――――――――― 1
Ⅱ　位置と環境 ―――――――――――――――― 1
Ⅲ　発掘調査の成果 ―――――――――――――― 13
　　基本土層 ―――――――――――――――― 13
　　検出遺構 ―――――――――――――――― 13
Ⅳ　おわりに ―――――――――――――――― 16
写真図版

例　言

1．本書は、彦根市教育委員会が平成18年度に彦根市立高宮幼稚園増築工事に伴って実施した発掘調査の成果を納めたものである。
2．本調査の調査地は、彦根市高宮町2391番地に位置する。
3．本調査は、平成18年10月30日～11月22日まで現地調査を実施し、以後、資料整理を行った。
4．本調査は、彦根市教育委員会文化財課が実施した。平成18年度の調査の体制は下記のとおりである。

課　　長	寺嶋　勲	課長補佐(兼文化財係長)	西田　哲雄
史跡整備係長	北村　義仁	主　　査	谷口　徹
副　主　査	志萱　昌賀	主　　任	水谷　千恵
技　　師	林　昭男	技　　師	池田　隼人

5．本調査には以下の諸氏が参加した。
吉原正興、中川浩行、西村朝男、池端清、野瀬善一
6．本書は谷口と林が執筆した。
7．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

Ⅰ　はじめに

本書は、彦根市立高宮幼稚園の増築工事に伴って実施した高宮城跡（彦根市高宮町2391番地所在）の発掘調査の成果をまとめたものである。調査は、平成18年10月30日から11月22日まで現地調査を実施し、その後、整理調査を行ない本報告書の刊行となった。

Ⅱ　位置と環境

〔地理的環境〕

高宮町は彦根市のほぼ中央部を南東から北西に流れる犬上川の右岸にあり、鈴鹿山系から流れる犬上川が多賀町の楢崎付近を扇頂とし西北方向を扇の軸として形成する扇状地に位置している。この地域は、彦根市竹ヶ鼻町から犬上郡豊郷町にかけて標高97～100m付近の扇状地の扇端部という立地条件から、多くの湧水池がみられる。

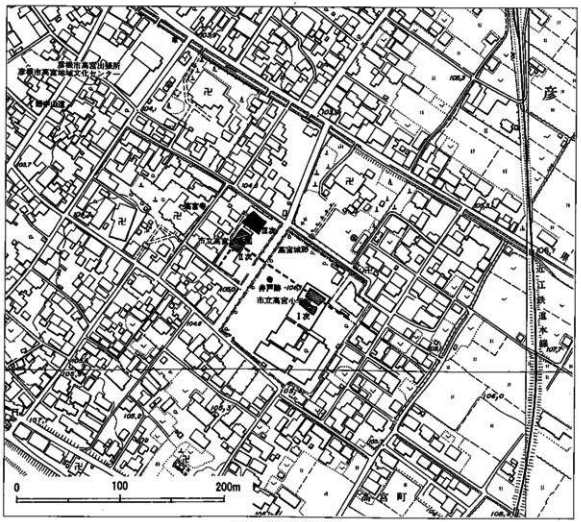


図1　高宮城跡位置図

遺跡の周囲の環境を見わたすと、北方には犬上川と同じく鈴鹿山系を源とする芹川が流れており、その両岸に鞍掛山（大堀山）と亀甲山（東山）が並んでいる。東・南方は、多賀大社・敏満寺付近の青竜山の丘陵に向かって平野が広がっており、西方は琵琶湖岸に向かって沖積平野が形成されている。

〔歴史的環境〕

高宮は古代犬上郡十郷の１つ高宮郷に当る。調査地の北西約200mには古代東山道が通過しており、これをほぼ踏襲するルートで中世東海道、近世中山道も通過したため、長く交通・流通の大動脈の地であったといえる。また、古代鳥籠駅の推定地は北方の大堀町・地蔵町付近に、中・近世の高宮宿は南方の高宮町にあったため、重要な中継点でもあった。

周辺に位置する遺跡を概観すると、縄文時代では、早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは後期・晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡・土田遺跡（多賀町）・小川原遺跡（甲良町）・金屋遺跡（甲良町）・北落遺跡（甲良町）などが当該期に当るが、特に土田遺跡・小川原遺跡では甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代では、中期以降琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曽川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降、宇曽川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。

古墳時代では、前期末頃に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段ノ東遺跡・木曽遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。

古代では、高宮廃寺（遊行塚遺跡）や竹ヶ鼻遺跡（恒河寺廃寺）などの古代寺院が営まれ、生産遺跡としては、これらへの瓦の供給が想定される瓦陶兼業窯である鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡がある。また、竹ヶ鼻廃寺や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物群や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、現在のＪＲ南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっている。

〔高宮氏と高宮城〕

さて、古代以降の高宮であるが、中世には荘園（高宮保・高宮庄）が成立し、街道筋には

市も立った。当時、高宮を領した高宮氏には２系統があった。１系統は鎌倉時代末に当地へ地頭として入部した紀州櫟（いちい）氏を祖とする高宮氏で、初代は宗忠と伝える。もう１つの系統は、将軍足利義持から勲功として６万貫を与えられて当地に入ったと伝える江南の六角氏頼の３男信高を祖とする高宮氏である。前者を北殿の高宮氏、後者を南殿の高宮氏とも呼ぶ。南殿の信高が当地に入った時、北殿の高宮氏は４代高義の時であったが、しだいに信高に勢力を奪われて弱体化する。この高宮氏が代々居城としたのが高宮城である。高宮城は典型的な平地城館で、現在の高宮小学校や高宮幼稚園辺り一帯が城館跡に比定されている。

戦国時代に入ると、近江は江北の京極氏、後にはその被官であった浅井氏勢力と、江南の六角氏勢力との覇権争いが激化していく。両勢力の境目に位置する坂田・犬上・愛知郡一帯の国人・土豪たちは、一族の存亡に腐心しつつ争いに巻き込まれて行くことになる。高宮氏も例外ではなかった。

高宮氏は、その当初は自らの出自の関係もあり六角氏と行動を共にしたようであるが、大永の年号を迎える前後には京極氏に加担するようになる。『江北記』には、高宮氏が京極氏の家臣となり、毎年６月１日に細着２端を進上するのが慣行になったと記しており、『高宮町史』にも高宮寺文書を典拠に、大永元年（1521）９月３日、六角定頼が荒神山に陣を構えて高宮城を攻め、攻められた高宮三河守（実宗ヵ）は佐和山城に逃げ込んだとある。

高宮氏の六角氏に対峙する関係は、京極氏がやがて零落し、その被官であった浅井氏が台頭しても変わることがなかったようである。『高宮町史』（高宮寺文書）によると、永禄２年（1559）６月、高宮城が六角定頼の子義賢の攻撃を受けて落城。高宮三河守頼勝は佐和山城に逃れた。翌３年、高宮城は再び六角定頼の攻撃を受けるが、この度は新荘駿河守の援軍などもあり死守したと記している。

永禄10年(1567)、織田信長の近江侵攻は、これまでの近江の情勢を一変させることになった。信長は、近江侵攻に先立って浅井長政と同盟関係を結ぶ。したがって長政配下の高宮氏も同様の関係にあり、永禄11年９月８日、信長は上洛に際して高宮城に陣取り、ここで長政と会見に及んでいる（『信長公記』ほか）。その後、翌12年１月７日にも信長は高宮に到来している（『足利李世記』）が、元亀元年（1570）６月28日、長政と信長の同盟関係は突如として長政により破棄され、両者は姉川で激突する。この姉川合戦に高宮氏も当然参戦したと考えられるが、『島記録』の姉川合戦に伴う討死・手負の中に高宮氏の名は確認できない。ただ、『高宮町史』に掲載された高宮氏系図（図２）を見ると、宗之の没年が元亀元年６月27日となっており、この戦による戦死の可能性も考えられる。

姉川合戦後、浅井勢は北の小谷城と南の佐和山城に分かれて敗走する。佐和山城では、そののち翌年２月24日までおよそ８ヶ月にわたる籠城戦が展開されるが、籠城衆の中に高宮氏の名は確認できない（『島記録』）。この籠城戦に高宮氏は参戦していない可能性が高い。実は高宮氏は早くから石山本願寺に帰依し交流を重ねてきた。天文13年（1544）には３月と８月に、高宮三河守が本願寺を訪ね、親しく証如と交流している（『石山本願寺日記』）。同様

時代	和暦	西暦	月 日	事 項	文 書 名	文書番号・収載書名
鎌 倉	弘安 2	1279		一遍智真、備前国福谷の法次に高宮に立ち寄り、高宮左衛門尉宗忠が一遍の威徳を仰いで一字を建立。	高宮寺縁起	高宮寺縁起
	正安 1	1299		高宮寺、時宗3祖他阿真教を開基として天台宗を時宗に改める。開山は切阿上人。	高宮寺縁起	高宮寺縁起
南北朝	建武 5	1338	8 月	細川所信大将の綸旨転載に、目賀田玄内とともに高宮四郎が従軍する。	目賀田文内軍忠状	東大史料編纂掛所蔵文書
	文和 2	1353	8 月	近江北部絹丹川砦軍中に、後三条殿皆目・高宮左・安食左・日夏左・八坂左がみえる。	足利義詮御判御教書案	智積文書
				近江北部絹丹川砦軍中に、高宮左上下・高宮弥七とがみえる。	絹丹川砦軍連名所々注文案	
	永徳 1	1381	10 月 26 日	高宮中務入道、犬上郡安楽寺祭の神話を停止する。	管領斯波義将施行状	広島寺文書
室 町	応永 1	1394	12 月 11 日	足利義満、高宮上総公文職と音貞名を河俣保興に安堵する。	足利義満御判御教書案	大徳寺文書
	応永 8	1401	6 月 3 日	足利義満、高宮上総公文職と音貞名を河俣保興に宛行う。		
	応永 32	1421	12 月 25 日	足利義持、高宮上総公文職と音貞名を河俣保興に安堵する。		
	年不詳		9 月 14 日	下河原氏、高宮一族中なかと上・愛智郡国人に小倉実忠に合力を要請する。	下河原高頼状案	黒田泰平氏文書
	文正 1	1466	9 月 14 日	河俣忠秀、高宮上毛吉貞名内田地を多賀庄忠に売却する。	河原忠秀田地売券案ほか	大徳寺文書ほか
	文明 2	1470		（京都氏の北近江における被官の中に高宮氏は含まれない）	江北記	群書類従
戦 国	明応 7	1498	11 月	高宮住人が興禅寺銀甲丸北の年貢丸畠者の中にみえる。	興禅寺銀甲丸庄年貢庄文	大徳寺文書
				高宮住人が興禅寺銀尼子殿の年貢丸畠者の中にみえる。	興禅寺銀銀尼子殿畠出案	
	永正 1	1504	7 月 2 日	（興殿・宿波・土田氏らも多賀社神官中に高宮氏は含まれない）	多賀社神事次第定番等	多賀大社文書
	永正 4	1507	11 月 28 日	（興殿・宿波・土田氏らも多賀社神官中に高宮氏は含まれない）		
	大永 1	1521	9 月 3 日	六角定頼、荒神山に陣し高宮城を攻める。高宮三河守、城を開いて佐和山に入る。六角方、高宮城を奪い佐和山を攻める。		高宮町史（伝高宮寺文書）
	～大永 3	～1523		高宮氏が京極氏の家臣となり、毎年6月1日に綿蚕二端を進上する慣行。	江北記	群書類従
	天文 2	1533	9 月 7 日	六角氏が、敬満寺領の鳥人を調達し村を統制するよう高宮赤河守、多賀神官中に命じる。	近江守護六角定頼奉公人連署奉書	多賀大社文書
	天文 7	1538		（六角氏の浅井亮政攻めによる坂田郡出陣に高宮氏は含まれない）	六角定頼陣立注文	朽木文書
	天文 11	1542	3 月 11 日	（興殿・宿波・土田氏らも多賀社神官中に高宮氏は含まれない）	多賀大社船造物主修繕所定帳等	多賀大社文書
	天文 13	1544	3 月 - 8 月	高宮三河守が大阪の石山寺内町を訪れ、以後、本願寺証如と交流する。	天文日記	石山本願寺日記
			10 月	遠敷郡各衆牧が高宮音で高宮赤河守・右京の父子と遠敷会を催す。	言継記行	群書類従
	天文 21	1552		六角義賢、浅井氏に抗して大上郡の久徳氏・高宮氏を誘うが高宮氏応ずず。		高宮町史（伝高宮寺文書）
	天文 23	1554	3 月	高宮右京亮・河副筑前守が摂津守護畠山の命に応じ中内町を訪れる。	証如上人日記	石山本願寺日記
	天文 24	1555	9 月 20 日	高宮右京亮殿□・高宮縫九郎・同平代左衛・同大弥左・高宮新右衛門尉、そのほか綾内・近江の武士等連で多賀大社覚蔵院に神送される。	多賀大社覚蔵院施制紙	多賀大社誌
	永禄 2	1559	8 月	六角義賢、高宮城を陥す。高宮三河守親勝、佐和山に逃れる。		高宮町史（伝高宮寺文書）
	年不詳			高宮三河守親勝、敬光して鎖子勝親誕生。		高宮町史（伝高宮寺文書）
	永禄 3	1560		六角義賢、高宮城を攻める。高宮勝親、新荘駿河守と高宮城を守る。		高宮町史（伝高宮寺文書）
	年不詳		1 月 20 日	磯野員昌、河副筑後守と高宮新右衛門尉宗興の争論を多賀社の神官中で解決するよう促す。	磯野員昌書状ほか	多賀大社文書ほか
	永禄 9	1566		磯野員昌・山崎氏・高宮氏らが浅井長政に従い織田軍に出兵する。	北中郡人数相立次第	山中文書
安土 桃山	永禄 11	1568	9 月 8 日	織田信長、上洛のため軍勢を率いて高宮に陣取る。	信長公記	信長公記
	永禄 12	1569	1 月 7 日	京都の足利義昭が三好方に攻撃されたことを聞き、織田信長、就京から高宮に出陣する。	足利李光記	大日本史料
	元亀 1	1570	6 月 28 日	（織田方軍に仕う浅死・子矢中に高宮氏は含まれない）	島記録	島記録
			12 月 27 日	浅井方の高宮左衛馬ちが、織田方の大鷹左近兵衛尉の大鷹狩を襲うが撃退される。	織田信長感状	神田泰平氏所蔵文書
	元亀 2	1571	1 月 23 日	（浅井方佐和山籠城衆・非難城衆に高宮氏は含まれない）	佐和山籠城衆・非難城衆書上等	島記録
			9 月 4 日	河尻秀隆が高宮寺と その塔頭に竹木伐採を保障する。	河尻秀隆書状	高宮寺文書
			9 月 21 日	丹羽長秀らが佐和山へ高宮右京亮を召し寄せ、元亀元年9月の勝浦の合戦時、大宮本願寺への寄進状を理由に誅殺する。	信長公記	信長公記
			9 月 25 日	丹羽長秀・河尻秀隆が多賀社の安全を保障、高宮右京亮らが多賀社へ預けていた物品は没収される。	丹羽長秀・河尻秀隆連署投書	多賀大社文書
			12 月 12 日	京都から観音へ下向する山科言継が彦根山を越て高宮に宿泊する。	言継御記	東大史料編纂所写真帳
	天正 1	1573	8 月 28 日	高宮宗光、小谷城で戦死。子の宗久は小谷城を脱出して高宮城に帰り、翌29日、城に火を放って一族離散。高宮寺焼失。		高宮町史
	天正 8	1580	11 月 10 日	寺田長光が高宮寺に地子免許の特権を与える。	寺田長光書状	高宮寺文書
	天正 10	1582	1 月	（織田信長が、近江衆に左義長への奉仕を命じるが高宮氏は含まれない）	信長公記	信長公記
	天正 11	1583	7 月 11 日	秀吉家臣が高宮寺に諸役免除を報じる。	秀吉家臣書状	高宮寺文書

※この表は、甲川金氏（彦高郷市教育委員会）が琵琶文化財巡回展示の展示解説シート用に作成したものを基本に、谷口が補筆した。

表1　高宮氏関連年表

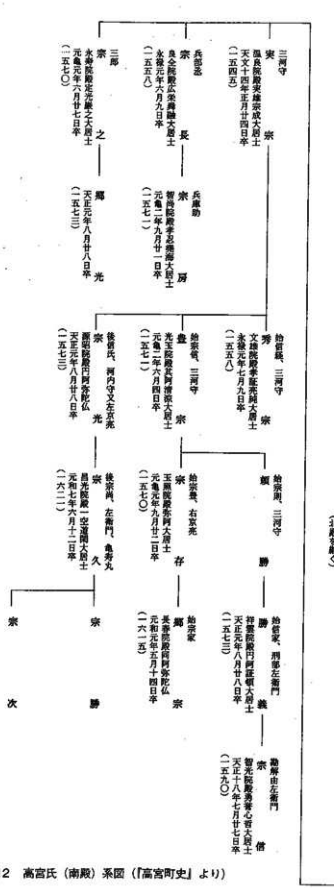


図2　高宮氏（南殿）系図（『高宮町史』より）

の記録が天文23年３月にも認められる。こうしたことから、元亀元年９月に石山本願寺光佐が諸国の衆徒に檄して挙兵し信長と争った折、高宮氏は近江を離れ石山本願寺にあった。佐和山籠城戦の終結後、織田信長は近江の制圧に力を注ぎ、丹羽長秀・河尻秀隆らに命じて湖東一帯の反目勢力の一掃を図る。元亀２年９月21日、丹羽長秀らによって佐和山城に呼び出された高宮右京亮(宗房ヵ)は、石山本願寺への加担を理由に謀殺されている(『信長公記』)。

天正元年（1573）８月、信長は小谷城を攻めて宿願であった浅井一族を根絶する。この戦では高宮氏も大きな犠牲を払い、浅井氏と命運を共にすることになった。『高宮町史』には、同年８月28日、高宮宗光が小谷城で戦死。その子宗久は小谷城を脱出して高宮城に帰り、翌29日、城に火を放って一族離散した。高宮城と隣接する高宮寺は炎上し、灰燼に帰したと伝えている。『高宮町史』の高宮氏系図を見ると、小谷で亡くなった宗光と没年月日の同じ人物が２人居る。郷光と勝義である。２人も小谷で戦死した可能性が高い。この出来事を期に高宮氏と高宮城は歴史の彼方に葬り去られてしまうことになる。やがて迎えた江戸時代、高宮寺は徐々に再興されて寺観を整えて行くが、高宮城は当時の「高宮宿絵図」を見ても一帯に人家はまばらで、江戸時代を通じて多くを藪地が占めたようである。

明治時代になると、この藪地を開墾して学校関係の施設が建てられるようになる。明治５年に旧本陣を仮校舎としてスタートした高宮小学校（高宮国民学校）は、その後、明治33年に当地に新校舎を建設。以後、高宮高等女学校・高宮実業補修学校（高宮青年学校）そして高宮中学校・高宮幼稚園などの教育施設が、当地一帯で新築や増改築を繰り返した。

こうして今日、高宮城の面影はほとんど失われてしまったが、現在の高宮小学校や高宮幼稚園一帯が往時の高宮城の跡地と考えられており、それらの北辺を流れる化粧川は、かつての高宮城を限る外堀の役割を担っていたと想定されている。わずかに残る遺構として、近年まで高宮小学校の運動場敷地内に高宮城ゆかりと伝える井戸が存在した（写真２）が、それも今では運動場の土砂の下に眠っている。

〔高宮城跡の発掘調査〕

以上のように、高宮城はその実体が杳として知れない状況にあるが、幸い昭和58年度と昭和59年度の２度にわたって発掘調査が実施されている（表２）。これまで調査の成果が公表されていないので、ここでⅠ次調査・Ⅱ次調査によって明らかになった成果を概観しておこう。

調査期間	調査の別	調査の原因	調査地	調査面積	調査の主体
昭和58年7月28日～9月30日	本発掘（Ⅰ次調査）	高宮小学校体育館改築	高宮町2447（高宮小学校内）	260㎡	彦根市教育委員会
昭和59年8月2日～9月14日	本発掘（Ⅱ次調査）	高宮幼稚園改築	高宮町2391（高宮幼稚園内）	180㎡	彦根市教育委員会
平成18年10月30日～11月22日	本発掘（Ⅲ次調査）	高宮幼稚園増築	高宮町2391（高宮幼稚園内）	150㎡	彦根市教育委員会

表２　高宮城跡発掘調査一覧

写真２　近年まで高宮小学校の運動場敷地内に残っていた高宮城ゆかりと伝える井戸

写真３　Ⅰ次調査遺構検出状況

写真４　Ⅱ次調査遺構検出状況

写真５　Ⅱ次調査堀検出状況

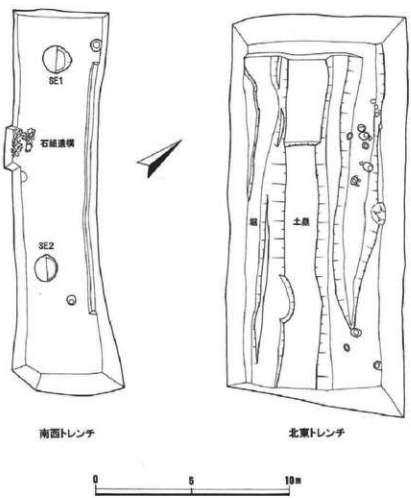


図３　Ⅰ次調査遺構図

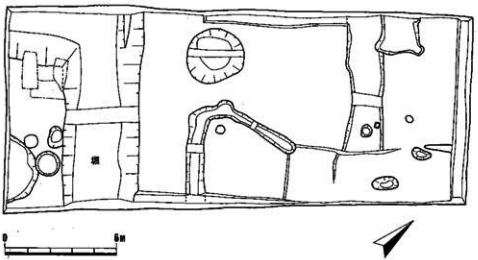


図4　Ⅱ次調査遺構図

昭和58年度のⅠ次調査は、高宮小学校の体育館改築工事に伴って実施したものである。調査は北東と南西の２つのトレンチが設定されている。調査の結果、北東トレンチでは、当地の地割に沿っておよそN－50°－W方向に並行して走る土塁と堀が検出されている。土塁は幅約２m、高さ約0.7mの台径を呈しており、その南西に隣接して堀が穿たれている。堀は幅２mを越えると推定されている。南西トレンチでは、２基の井戸（SE１・SE２）と石組遺構が確認されている。２基の井戸はともに円形を呈する素掘り井戸であり、SE１は深さが２mを越える。石組遺構は竈を想定しているもので、組まれた石は火を受けて焼けている。Ⅰ次調査で検出した土塁や堀は高宮城を画するものであり、また、その南西で確認された井戸や石組遺構は城内の痕跡であると推定されるが、江戸時代に描かれた「高宮宿絵図」などを仔細に見ていくと、当地は藪地の中に黄檗宗円成庵が存在した地に相応しており、庵の遺構が混在している可能性もある。出土遺物を細かく検討したが、明確に遺構から出土したものが少なく、出土遺物による時代判定はできていない。

Ⅰ次調査で出土した遺物の多くは、遺構面で採集したものである。図５の１～13がⅠ次調査の出土遺物である。１・２は中世土師器皿で、１は口縁付近にタールが付着している。３～７は時期幅があるが瀬戸・美濃の施釉陶器で、３・４は灰釉反り皿、５・６は天目茶碗で、いずれも削り出し高台で周辺露胎である。７は灰釉卸皿である。８は常滑の甕、９は信楽の甕である。10・11は石製品で、10は砥石、11は硯である。12・13は瓦で、12は蔦文を中心飾りとする軒平瓦で、13は右巻きの三つ巴文の外側に連珠が巡る軒丸瓦である。遺物の時期幅は、若干古いものもみられるが、概ね16世紀後半～17世紀代が中心と考えられる。

昭和59年度のⅡ次調査は、高宮幼稚園の改築工事に伴って実施したものである。調査の結果、調査トレンチの南西側でＬ字に曲がる堀を検出している。堀の幅3.5m、深さ1.5mを測り、堀の内部には灰褐色粘質土が厚く堆積していることから意図的な埋め戻しが推測され

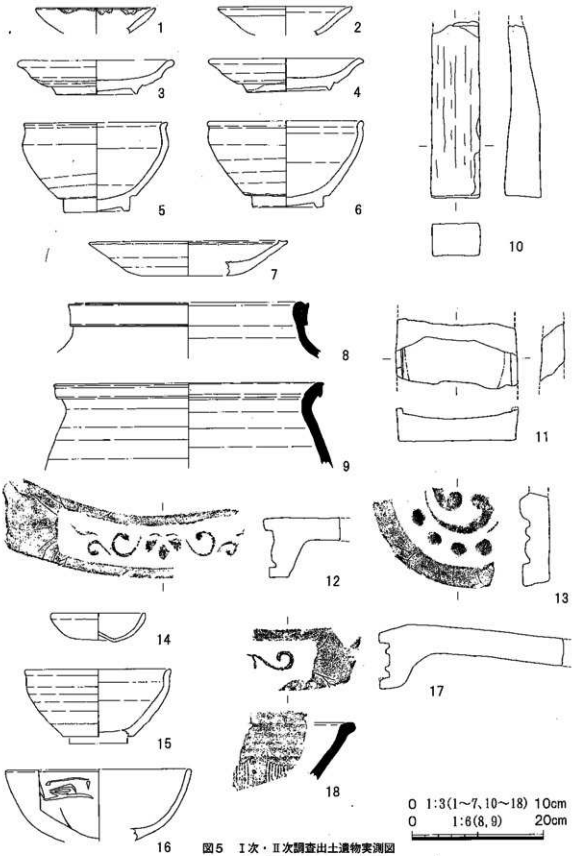


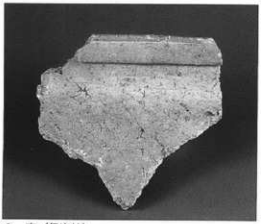
図5　Ⅰ次・Ⅱ次調査出土遺物実測図
（Ⅰ次調査：1～13, Ⅱ次調査：14～18）

4　灰釉反り皿（瀬戸・美濃焼）

5　天目茶碗（瀬戸・美濃焼）

6　天目茶碗（瀬戸・美濃焼）

8　瓮（常滑焼）



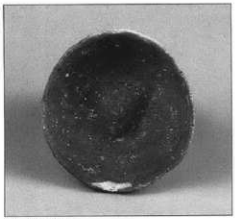
9　甕（信楽焼）

10　砥石

12　蔦唐草文軒平瓦

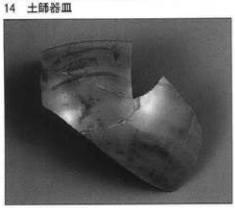
13　三つ巴文軒丸瓦

写真６　高宮城跡Ⅰ次調査出土遺物（番号は図５の実測図に対応）



14　土師器皿

15　天目茶碗（瀬戸・美濃焼）



16　青磁雷文碗

17　唐草文軒平瓦

写真７　高宮城跡Ⅱ次調査出土遺物（番号は図５の実測図に対応）

ている。堀の北東、つまり堀の外側では土坑や浅い溝などが確認されている。土坑は径2.5m、深さ0.6mの比較的浅い円形のものである。

Ⅱ次調査の出土遺物も多くが遺構面で採集されたものであり、明確に遺構から検出した遺物はほとんど確認されていない。図５の14～18がⅡ次調査の出土遺物である。14は中世土師器皿で底部に突出をもつ。15は瀬戸・美濃の天目茶碗で高台周辺露胎である。16は貿易陶磁器で、外面口縁付近に雷文帯をもつ青磁の碗である。17は反転する唐草をもつ軒平瓦である。18は信楽の擂鉢で、７条１単位のすり目をもつ。Ⅱ次調査の遺物の時期幅も、Ⅰ次調査と同じく16世紀後半～17世紀代が中心となる。

Ⅰ次・Ⅱ次調査を通してもっとも注目される遺構は、両調査で検出した堀や土塁の存在であろう。両堀を繋ぐと、ほぼ当地の地割に並行してN－50°－Wの方向に直進しており、Ⅱ次調査の西隅で南西方向に直角に折れている。高宮城の主要部はこの堀に画された南一帯に広がっていたと推定されるが、土塁の広がりや堀と土塁が構築された時期の決定など今後の調査に残された課題も多い。

Ⅲ　発掘調査の成果

基本土層

調査地は、標高105m前後の扇状地上に形成された高宮の市街地に位置している。今回実施したⅢ次調査の調査地には、近年の幼稚園造成に伴って行なわれた整地や客土が70cm余に厚く層を形成しており、その下に地山Ⅰ・地山Ⅱ・地山Ⅲの各堆積層を確認した。地山Ⅰは砂粒を比較的多く含む黄褐色粘質土で、今回検出した各遺構の切り込み面でもある。地山Ⅱは炭化物片を多量に含む淡黄褐色粘質土で、地山Ⅰと同様に20cmから30cmの厚さに堆積している。地山Ⅲはもっとも安定し厚く層を形成する暗褐色粘質土で、上部には若干の炭化物片を混入している。

留意したいのは地山Ⅱと地山Ⅲの上部で確認された炭化物片の存在である。先にⅡ章の「位置と環境」でも触れたように、天正元年（1573）の織田信長による小谷城攻めに際して高宮宗光らは戦死し、宗光の子宗久は高宮城に逃げ帰って８月29日に城に火を放っている。調査地全域に多量に包含する炭化物片は、このことを証左するものと推測される。因みに高宮城が焼失した際に隣接する高宮寺も類焼しており、高宮寺は、その後百年余を経た元禄５年（1692）に本堂の落成をみるなど徐々に寺観を整えていく。しかし「高宮宿絵図」を見ても、高宮城跡一帯は人家もまばらで長く藪地が広がっており、藪地に学校関係の施設が建設されるようになるのは明治時代以降のことであった。これらのことを考慮すると、地山Ⅲは高宮城が存続していた時代の遺構面、地山Ⅱは高宮城焼失後の整地層、そして地山Ⅰは藪地を開墾した後の土層、つまり明治時代以降の土層と思われる。

検出遺構

今回の調査は、幼稚園の増築工事に伴うものであり、増築面積150㎡を調査対象とした。70cm余の整地土・客土を除去し、地山Ⅰを追いかけて遺構の検出を行なった。その結果、溝２条（SD１・SD２）、瓦筒土坑（SX１）、若干のピットなどを検出したが、２条の溝については縦横に走る旧校舎の基礎や古い配管による攪乱に阻まれて、表面での遺構検出が困難であった。そこで、溝が伸びる方向に５本の細長いトレンチを設定して、溝を追認することにした。同時に、トレンチを利用してさらに下層の地山Ⅱおよび地山Ⅲの遺構の存否を確認したが、遺構が全く認められなかったので、下層の掘り込みは行なわず、地山Ⅰの遺構調査のみを実施した。以下に各遺構を詳述することにしよう。

溝（SD１）

当地の地割りに並行して南西から北東に流路を刻む溝である。幅1.4m、深さ0.6mを測る。南西側は調査地約2.5mを残して途切れる。断面は逆台径に近い椀形を呈しており、上端約0.1mは鍔状に浅く広く広がる。溝の堆積土は７層が識別される。①淡黄褐色粘質土、②暗灰黄色砂質土、③淡黄褐色粘質土、④灰黄褐色砂質土、⑤褐色粘質土、⑥灰褐色粘質土、⑦暗

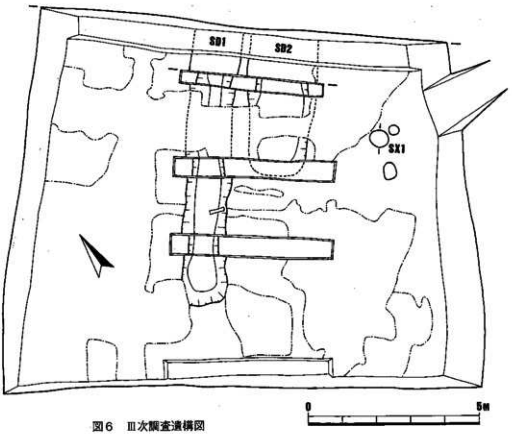


図6　Ⅲ次調査遺構図

灰黄色砂質土である。溝内からは幕末～明治時代の行平・急須・擂鉢などの陶器片、染付印判手茶碗などの磁器片、瓦、鉄製品などが出土している。鉄製品は幅12.5cm、長さ40cm を測る用途不明の長方形の薄板で、溝の肩より流れ込むような状況で検出した。

溝（SD２）

SD１に並行しSD１のすぐ南東を流れる溝。溝は調査地のほぼ中央で途切れている。幅2.0m、深さ0.5m を測る。断面は比較的浅い椀状を示しており、トレンチ北東壁の断面観察では、SD１上端の鍔状の広がりに切られている。溝の堆積土は２層からなり、①淡黄褐色粘質土、②淡黄橙色粘質土である。溝内からはSD１と同期同種の日常雑器が若干出土している。

瓦筒土坑（SX１）

直径55cm、復元高30cm程度の円筒形の瓦質陶器を井筒状に埋置し、さらに下へ直径40cm、深さ30cmほど円形に掘り窪めた土坑である。土坑底部は平坦に仕上げている。瓦質陶器の上部は破損して土坑内に落ち込んでいたが、遺存する下端を仔細に観察すると、平滑な面取りがなされ、面取りの３箇所にはコの字状の小さな切り込みが設けられていた。土坑内の堆積土は３層が識別され、①灰黄褐色粘質土、②灰黄色粘質土、③暗灰黄色粘質土である。②層からは先述の瓦質陶器片がまとまって出土した。瓦質土坑の用途は不明である。

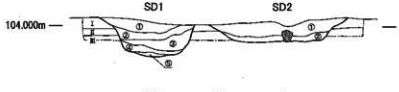


図 8 溝(SD1)・溝(SD2)断面図

図 7 瓦質土坑(SX1)断面図

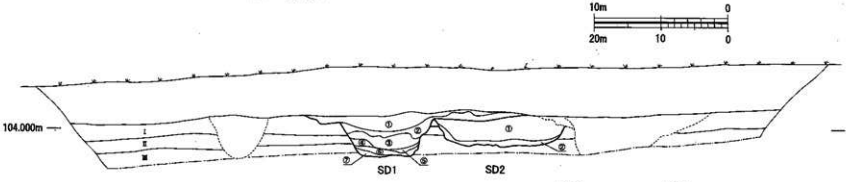


図 9 調査区北東壁断面図

その他の遺構

SX１の周囲で径30cm～20cmの小規模なピットを２基検出した。ともに断面が碗状で、暗黄褐色粘質土が堆積していた。

Ⅳ　おわりに

今回の調査は、撹乱に阻まれたこともあり大きな成果を得るには至らなかった。わずかに、幕末から明治時代と考えられる溝２条（SD１・SD２）、瓦筒土坑（SX１）、若干のピットなどを検出したにとどまり、高宮城に関連する遺構は全く確認できなかった。ただ、これまで行なわれた２回の調査成果を総合して考えると、高宮城は両調査で検出したおよそN－50°－W方向に走る堀や土塁に画された南一帯に主要部が広がっていると想定され、今後の調査の進展に期待が持たれる。

〔主要参考文献〕

『高宮町史』高宮町史編纂委員会　1958

『高宮寺と時宗の美術』彦根城博物館　1999

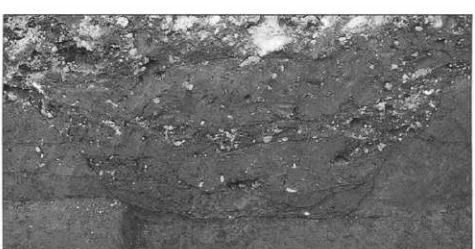
『新修彦根市史　第５巻　史料編　古代・中世』彦根市史編集委員会　2001

遺構検出状況 〔南東から〕

遺構掘削状況 〔南東から〕

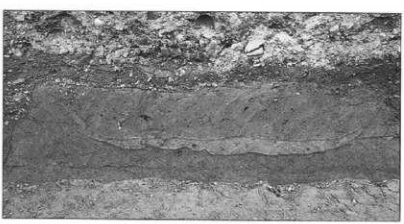
図版二

溝（SD1）検出状況　［南西から］



溝（SD1）土層断面　［南西から］

溝(SD2)検出状況 〔南西から〕



溝(SD2)土層断面 〔南西から〕

瓦筒土坑(SX1)検出状況 〔南東から〕

図版四

高宮氏の菩提寺である高宮寺山門

高宮寺にある高宮氏墓地

報告書抄録

ふりがな	たかみやじょうあと3
書名	高宮城跡Ⅲ
副書名	高宮幼稚園増築工事に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	39
編著者名	谷口 徹・林 昭男
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号　TEL 0749－26－5833
発行年月日	20070331

所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
高宮城跡	彦根市 高宮町 2391	25202	140	35度 14分 1秒	136度 15分 29秒	150㎡	20061030 ～ 20061122	幼稚園増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高宮城跡	城館	幕末～明治	溝など	染付磁器・陶器・瓦など	

彦根市埋蔵文化財調査報告第39集

高宮城跡Ⅲ

－高宮幼稚園増築工事に伴う発掘調査報告－

平成19年（2007年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
彦根市尾末町1番38号
TEL 0749－26－5833

印刷・製本：ニホン美術印刷株式会社
岐阜県大垣市西外側町2－15

SITE OF TAKAMIYA-JYO

March, 2007

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division